神戸女子短期大学　論攷　四七巻　一―九（二〇〇二）

―報　文―

貞享二年における鬼貫の「悟り」考

入　江　昌　明

一　はじめに

『独言』上巻の第五十一段は、鬼貫が貞享二年までの俳歴を回顧したものとして広く知られている。中でも

貞享二年の春、まことの外に俳諧なしとおもひもうけしより、そのかざりたる色・品も、かの一句のたくみもことゞくくうせて、それゞは皆そらごとゝなりぬ。

とある一節は、俳道を開悟した言として特に有名である。だが、この一節をめぐっては、記述通りの大悟があったとする説（以下、A説と仮称）と、これは『独言』執筆時の表現であって貞享二年当時には「まこと」の語を用いて表されるような大悟はなかったとする説（以下、B説と仮称）とがあり、いまだ定説を見るには至っていない。近時、大勢を占めているのはB説である。今、B説の根拠を山本唯一氏の『元禄俳諧の位相』に拠って箇条書きにして示せば、次のごとくである。

① 鬼貫は貞享二年の春から同三年の春にかけて俳諧から遠ざかっている。

② 貞享三・四年に発表された句が「まこと」とはおよそ縁遠い作品であり、同五年になってもその傾向は薄らいでいない。

③ 鬼貫が「まこと」なる語を初めて使ったのは元禄五年、月尋の『高砂子集』序で、それも「まこと」説としてかたまった用例とは言えない。

①と③を少し補足説明しておくと、①は貞享二年の春に俳道を大悟したのであれば当然その後の俳諧活動は活発になるはずだが、逆に鬼貫は俳事から遠ざかっているので『独言』の記述には従えないというものである。③は同年春に「まこと」の悟りがあったのであれば七年以上後の元禄五年六月まで「まこと」の語が使用されていないのは不自然であるし、元禄五年に初めて使用された「まこと」の語の用例も『独言』における用例と比べるとニュアンスが異なっているので、貞享二年の大悟はなかったというものである。

私も③を主な理由としてB説に加担したいと思うが、貞享二年春に『独言』に記されているような大悟がなかったとすれば、同箇所はいったいどう理解すればよいのであろうか。この点に関しては、記述内容に信憑性が乏しい以上論じる価値もないと考えられたためか、これまでさほど言及されることもなく、僅かに岡田利兵衛氏と今栄蔵氏が貞享二年時の悟りは『誹道恵能録』（延宝八年刊）序に見える「本来無一物」の

悟りであったとされた[1][2]他は、井口壽氏が「俳諧は平常心が眼目である」との悟りであったと異説を出されただけである[3]。同年にある種の悟りがあったとする点では私見も同じであるが、悟りの内容に関しては見解を異にするので、本稿では貞享二年の「悟り」に問題を絞り、当時の資料の再検討を通して私見を述べてみたいと思う。

二　『かやうに候ものハ青人猿風鬼貫にて候』における青人の俳諧観

A説の主な根拠となっているのは、『かやうに候ものハ青人猿風鬼貫にて候』（以下、『かやうに候ものハ』と略称す）における青人の序（貞享元年十月下旬執筆）である。B説の立場をとる者としては検討しておく必要があると思われるので、次に全文を掲出する。周知のごとく、青人は鬼貫の従兄弟で鬼貫よりも一歳の年長である。

三人眠る窓の内に人来て、予が俳-眼をとふ。答て曰、「鉄-牛喫尽欄-辺ノ草」。又とふ。「一摶をあらためて嶋の青人とはいふや」。答て、「二郎吉成人して二郎兵衛」。時に則首をうなだれて、猶世の風俗をとふ。それより枕に座をゆるくしかたる。「つら〳〵よの有様をみるに、とかく人に誉られんことをもとゝし、其風に似せ、此流をたねとし、一生他の心に旅寐して、本心の居宅をしらず。あるは又、言葉に色・品をかざり、句作に白粉をぬり一風となし、暫よのこゝろをとるもあれど、行水させて見れば、もとの悪女にひとし。たゞ願くはこゝろを心のごとくせん人ぞゆかし」といへば、また夢さめて、松かぜ計やのこるらん。

復本一郎氏は、私に傍点を施した箇所が第五十一段の当該箇所、貞享二年の春、まことの外に俳諧なしとおもひもうけしより、そのかざりたる色・品も、かの一句のたくみもこと〴〵くうせて、それ〴〵は皆そらごとゝなりぬ。

と「明らかに類似の姿勢よりの俳諧観」であるとして、「鬼貫とごく親しい青人が貞享元年に、右に見たごとき俳諧観に到達していた事実からして、翌貞享二年に鬼貫が『まことの外に俳諧なし』と道破することは、少しも不自然ではないように思われる」と述べられている[4]。青人の序文を一読すると、「こゝろを心のごとくせん」と「まことの外に俳諧なし」はほぼ同意のようにも読めるが、実際はどうだったのであろうか。まず、この点について検討を加えてみたい。

『かやうに候ものハ』は、謡曲の名乗りに準えた奇抜な書名からも内容の一端が窺えるように、百韻の後半部を三巻ともに独吟にしたり、その独吟の一部をさらに文章に代えたりなどした極めて遊興的色彩の濃い作品である。櫻井武次郎氏は青人発句の三吟百韻が青人の商用のために中断されている点や、青人独吟の終りの三句、

つい句作りハ見る人〻に任なり
見る人〻にまかすなりけり

あゝ人あらバ相談支度華の比
眠りて降覚て。もとの春雨

などを挙げて、前者に俳諧が「あくまで余技のたしなみである旦那芸の面」を、後者に「知った仲間どうしの楽しみごとである点」を指摘されているが[5]、そうした余技的、遊戯的な傾向は本書の大きな特徴の一つとなっている。本書の作者について、『俳文学大辞典』は書名中に名前の見える青人・猿風・鬼貫の三人の名を挙げている。しかし、その三人の

中で編者としてリーダーシップを発揮したのは青人で、同書に特徴的な余技的、遊興的傾向も青人が自己の俳諧に対する考えを強く打ち出したからではないかと思われる。そのことを示唆する記述が青人と同郷同世代で親しい交流もあった百丸の手に成る『在岡俳諧逸士伝』の青人伝に見えるので、次に掲出する。

壮歳ニ及ビ、世上ノ誹体ノ野ナルコトヲ疾ンデ、乃チ一書ヲ著ハシテ曰ク、尤モ句躰ヲ得タリ。然レドモ其ノ詞花ニシテ、実少ナシ。醜女ノ脂粉ヲ著クルガ如シ。浴シテ後チ相見バ何ゾ思慕スルニ足ラン。因テ交会ヲ絶ス。（原文は漢文）

百丸は書名を明らかにしていないが、私に傍点を施した箇所が先に掲出した『かやうに候ものハ』の序の一節（言葉に色・品をかざり、句作に白粉をぬり一風となし、暫よのこゝろをとるもあれど、行水させて見れば、もとの悪女にひとし）を踏まえていること、また『かやうに候ものハ』について言えば、三人のうち青人の名が最初に掲げられていること、青人が全体の序を書き青人だけが序に続けて半歌仙を載せていること、全体の序の結びに謡曲「松風」の一節が用いられていることから書名も青人が命名した可能性が高いこと、跋を青人の弟の鉄卵が書いていることなどから、百丸のいう「一書」とは『かやうに候ものハ』を指していると考えられる。青人が『かやうに候ものハ』の著者だとすれば、同書の傾向から推して同序の「こゝろを心のごとくせん人」の箇所も「何事にも束縛されず勝手気ままに俳諧を楽しむような人」という意に解するのが著者の真意に近いと考えられ、鬼貫と青人の言わんとするところにはかなりの径庭があったということになる。元禄三年、鬼貫は大悟の成果を世に問うため『大悟物狂』を刊行しているが、青人はその二年後に百丸など伊丹の俳諧仲間と相変わらず遊戯的傾向の著しい『伊丹生俳諧』を刊行している。その後の両者のそうした対照的な俳諧活動からいっても、元来鬼貫と青人の俳諧に対する考え方には大きな違いがあったとみるべきで、『かやうに候ものハ』の青人の序をもってA説の根拠とする説には従いがたい。

なお、青人が俳眼とした「鉄牛喫尽欄辺ノ草」であるが、これは『句双紙』の七言の部に見える禅語で、出典は『人天眼目』である。同書は臨済宗・雲門宗・曹洞宗。潙仰宗・法眼宗の五家の綱要を集めたもので、その曹洞宗の綱宗の「五位」の一つ、「兼中到」に対する草堂清の頌に、「兼中到、銕牛喫シ尽ス欄辺ノ草。却リテ牧童ニ問フ何ノ処ニカ居ス、鞭チ東西ヲ指シテ一宝無シ」（原文は漢文）とある。なお、参照した『重修人天眼目鈔』（寛永乙亥夏五吉旦　中野市右衛門刊）には、「銕牛云々」の箇所に「一切此ノ地ニ到リ泯絶スルノ処也」（原文は漢文）の注が施されている。「鉄牛」とは黄河氾濫を鎮めるために禹が作ったという大鉄牛で、黄河の守護神とされる。禅語では「鉄牛之機」として用いられ、体は不動者であるが、用は応じて迹なく自在である大機用をいい、また、無相の仏心印を喩えていう（『碧眼録』三八）。従って、「陜府鉄牛」とは大力量の人の無作の妙用を喩えていうので、青人の示した「動かぬ鉄牛が欄辺の草を食い尽くす」とは、禅家のよく用いる無作為の玄妙な働きをいったものと解される（若藤正芳氏のご教示による）。しかし、『かやうに候ものハ』の内容からいって、青人がこの禅語をどの程度深く理解していたかという点については疑問が残る。

三　貞享元年までの鬼貫の俳諧観

鬼貫は『独言』上巻の第五十一段に、まだ「文字あまり・文字たらず、或は寓言、或は異形さまゞ〳〵いひちらせし比」から、既に「修行しつる覚もなくてなす所、よき句にて有べきやうはあらじと、ひたすら我心にうたがひを起して、更にこゝろをとゞむる事」がなかったと記している。また、同段の後半部には「たゞ俳諧は狂句・作意をいふとのみ心得たるばかり、一概にかたよるべき道にもあらず、猶深き奥もやあらんと、延宝九年の比より骨髄にとをりて、物みな心にそむ事なく、やゝ五とせを経て、貞享二年の春、まことの外に誹諧なしと云々」とも記しており、こうした記述から鬼貫には若い時から内省的傾向が強く、俳諧上の悩みもかなり早い時期から始まっていたことがわかる。では、貞享二年に悟りを得るまでの鬼貫の俳諧観とはどのようなものだったのであろうか。以下、その点について年代順に見ていくことにする。

延宝八年、二十歳の時、鬼貫は『誹道恵能録』を出版している。本書は伝本がなく、『続七車』（元文二年序）によって自序と独吟百韻の第三までが僅かに知られるのみである。その序の冒頭は次のごとくである。

板行本樹木にあらず。懐帋又台になし。本来無一物。是、我俳道の眼也。

「本来無一物」を俳眼とするとは、序の後半部に

一旦活然として俳道に眼をひらき、始て曾溪大師無一物ノ旨ヲ識得ス（原文は一部漢文）。

とあるように、慧能禅師の偈（菩提本無樹　明鏡亦非台　本来無一物　何処有塵埃）の「本来無一物」を俳諧に向かう根本姿勢としたというのである。「本来無一物」はあらゆるものの真実の姿は本来執すべき一物もないことをいうので、それを自らの俳眼とするとは、具体的には俳書を著したり自作を懐紙に書き留めたりすることにとらわれず、自由に作句することを基本姿勢とするというほどの意味であろう。この開眼がまだ観念的なものに過ぎなかったことは、次に取り上げる天和三年の句文からも明らかであるが、鬼貫の真の俳諧追求が禅を通して始まっており、二十歳の頃から既に形式的なものから自由になろうとしていることは大いに注目される。

『続七車』に拠れば、延宝八年から三年後の天和三年（二十三歳）、鬼貫は次のような句文を草している。

元　旦

芦の屋の灘の塩焼いとまなみ

蓬莱の山陰より翁二人出て、一人の翁の曰ゞ、「此句古哥の上の句也。夫のみならず、歳旦の心も又誹言もなし」と。又一人の翁の曰ゞ、「汝、色を見ていまだ其色に奪はるゝ也。尤古哥の上の句なれども、其いとまなき海士だにも、けふはなどいとまなくてあらんとなり。又上の句をとりて我物にしたる所、誹諧にあらずや」といへば、「実至極の作意なり」とて、心又ひとつになりて、もとの山陰に入て、見えずなりぬ。

歯がために二人の翁喰にけり

鬼貫の句は、『伊勢物語』の第八十七段や『新古今和歌集』巻十七他に載る有名な古歌（蘆の屋の灘の塩焼きいとまなみ黄楊の小櫛もささず来にけり）の上の句をそのまま用いたものである。二人の翁を登場させ

両翁の問答の形で俳諧観を表明したこの一文は、次の二点で重要である。

まず第一点は、有名な古歌の上の句を敢えてそのまま用いて歳旦吟とし、歳旦吟を詠む場合の心得や「誹言」の有無、本歌の取り方など従前の約束事から自由であろうとしている点である。第二点は、そうしたものから自由であろうと願いながらも結局は新しいものを打ち出せず、古歌の上の句をそっくり借用して我が句とするような従前通りの作意に俳諧性を認めて自画自賛している点である。鬼貫は『独言』上巻の第五十一段で、延宝九年の頃から「たゞ俳諧は狂句・作意をいふとのみ心得たるばかり、一概にかたよるべき道にもあらず、猶深き奥もやあらん」と懊悩するようになり、何事に対しても心が引き寄せられるということがなくなったと記しているが、「色」から離れようとしながらまだ離れられないでいるこの頃は、まさにそのような時期にあたると言ってよいだろう。

貞享元年、二十四歳の時、鬼貫は『有馬日書』を著している。これは「懶―閨欝におかされ」て同年三月、有馬温泉に赴いた時の入湯日記であり、紀行である。本書は原本が伝わらず、『続七車』によってその一部が知られるのみである。それに拠ると、俳諧観が窺えるような記述は見られない。ただ同書に収載される鬼貫の作品は、発句が

猶帰厂田夫が鍬のしらべ哉
一聲に雉子二羽きく山路哉
我軽く湯衣かへせん明日の宿
百丸はいかにながむる春の月

独吟の連句が

御幸絶て膝行車や春の山
霞跡とふ下踏の手枕
冱回ごもくた塚に犬富て
黒き男のとつぽりとくれ
旅功者きのふの信折道かへし

といった内容で、前年に刊行された『三人蛸』に載る句と比較すると、やはり異体ではあるが放埒さがやや影をひそめ、全体に穏やかな作風になってきていることが感じられる。『有馬日書』の跋によれば、同書を読んだ猿風は「風雅他に異也」との感想を洩らし、「如何としてか板行せざるや」と出版を勧めたという。それに対し、鬼貫は「世に人有リテ俳諧なし。俳諧有リテ人なし。故に止ぬ」（原文は一部漢文）と答えたと記しているが、この猿風の言葉は貞享元年の作品が同郷の親しい俳友の眼には既に異風と映るものであったことを伝えていて注目される。

こうした自己に忠実な作品を創造していこうとする真摯な態度の一端は、同じ貞享元年の秋に刊行された『かやうに候ものハ』における鬼貫発句の百韻の序にも認めることができる。

空濶ノ人ノ曰、竜ハ円シ、亀ハ長シ。
あゝ跡打じや這ノ風顛漢
まろくても長くてもすむ水の面にうき世のちりの果をしらねば
自呑庵　囉々哩鬼津ら序

延宝八年の『誹道恵能録』の「本来無一物」の悟りとの関連が指摘される禅[6]気を帯びたこの序は、この時期においても鬼貫が俳禅一致の立場から絶対自由の境地を目指していたことを窺わせるものである。

四　貞享二年の鬼貫

貞享二年の鬼貫の動静を伝えるものに、「貞享三丙刁のとし　三月下旬」の奥付を持つ西吟編『庵桜』がある。同書には、次のような鬼貫の句文が見える。

躑躅桜南朝の跡見にいらむ

二木の桜に華あり。華ちらずして實を実のれり。玉は露をからずして句の中に照ス。あら珎タル哉やな。予は去年の春、誹を狂哥に葬リ、寂々として腹に其世界なし。今日戯れのあだ桜に我亦誹を潤リ。囉〻哩が哥の父母は此桜ならむ。

文中の「去年の春」とは一年前の貞享二年の春を指すから、この一文によって鬼貫が同年の春から翌年の春まで俳諧から遠ざかっていたことがわかる。そのことを百丸も同書で、

やよいの廿日あまり、上嶋氏の点也といへる隠士、予ガ誹の吟友なりし。今迠波津に哥囀らぬ身と成て、梅のやどりを求む。是囉〻哩の鬼貫也。此比古里へ暫く帰来ぬ。

と記している。「哥囀らぬ身」とは俳諧を作らぬ身の上の意である。俳諧から離れた鬼貫は大阪に出て学問修業に励んだようで、西吟はその精進ぶりを同書に、

去年の已来は、坂-陽の窓に時しらぬ雪を挑(カヽ)げ、夜終卓-机をならし、朱筆に暇のなからんに、いま此時のともなひ、旧友末を潤せり。（略）さあ〳〵一句のあらんかし。

と伝え、久しぶりに訪れた鬼貫に作句を促している。前掲の鬼貫の「躑躅桜」の句は、この西吟の求めに応じておよそ一年ぶりに詠んだ句である。

貞享三年の春に鬼貫が記した句文の中で問題となるのは、「予は去年の春、誹を狂哥に葬リ、寂々として腹に其世界なし」の箇所である。「去年の春」とはもちろん貞享二年の春のことで、「誹を狂哥に葬リ」とは従前の俳諧と決別したことをいったものである。この箇所については、鬼貫が一時的に俳諧から離れようとしたとか[7]俳諧を捨てたとみる説もあるが[8]、これまでみてきたように、真の俳諧を求めて模索を続けてきた鬼貫がその答えも得られぬまま突然放擲するとは考えがたいので、これはやはり貞享二年の悟りについて述べたものと解すべきであろう。貞享二年の春、鬼貫はついに真の俳諧の在りように想到し積年の懊悩から解放されたので、暫く俳諧から離れて宿願であった「武名(ブメイ)ヲ立(タテ)テ祖(トフツヤ)ヲ顕(アラハ)」（「藤原宗邇伝」）すため大阪に出て学問修業に打ち込むことを決意したのである。

悟りを得たばかりの俳人が俳諧から遠ざかるということは一般的には考えにくいことであるが、「藤原宗邇伝」を一読すれば明らかなように、鬼貫の場合は十分あり得ることだと言ってよいだろう。なぜなら、鬼貫には実生活と俳諧活動を別個のものとして捉え、俳諧よりも実生活を優先させようとする傾向がかなり濃厚に認められるからである。

五　『大坂辰歳旦惣寄』に見える鬼貫の句文

貞享五年に刊行された『大坂辰歳旦惣寄』に、比較的長文の鬼貫の句文が収載されている。重要なので次に全文を掲出する。

歳　旦

松に古今の色なし。一句に四つの季なふして、しかもゆたかなる心深し。我このことぶきを始て世に常盤句をうたふ。

　　囉〻哩　鬼　貫

津の国の灘の塩やきいとまなみ

蓬莱の山陰より翁出て問フ。「ゆたかなるこゝろ深し、と前にはかけれど、一句は暇なき躰、これ相違ならずや」。我答テ、「津の国のなだの塩やきいとまなみつげの小ぐしもさゝず来にけり、とよめるその海人だにも、けふはなど暇なくてあらん」となり。翁曰、「しからば汝が発句にあらず。是古哥の上の句也」。予曰、「春といふことばは古今春なれど、今年の春か、こぞのはるか、汝が心をきかん」。翁又問フ、「季なき句法外なり」。答テ、「まったく法外にあらず。四季は元是雑よりおこらずや」といへば、翁大笑ひして頓哥をよめる。

人間にめでたがられて是非もなく天ものいはですぐる春かな

また一人翁出てわらって曰、「囉〻哩が誹の大道に有無の返答、いまだ世にかゝはれり」。予、「翁今乳をのまず、童子に髭なし」とこたふ。時に両翁、「いざせまき所におらんより、ひろき世界にすまん」とて、我ガ腹中に入て見えずなりぬ。

亦

歯がために二人の翁喰にけり

　　歳暮

しだ売て夜ルあたま刺ル山路哉

本句文は先に掲出した天和三年の句文を一部改変したものである。この句文については、夙に貞享二年の悟りとの関連が指摘されながら[9]、その後悟りと関連づけて検討されることもなく今日に至っている。これまで本句文がそれほど重視されなかったのは、貞享五年から二年後の元禄三年に『大悟物狂』が刊行されており、同書の跋に鬼貫の俳諧観が整然とした形で示されているからだと考えられる。しかし、本句文と同跋とを比べると鬼貫の俳諧に対する考えは比較にならぬほど深まりを見せているので、貞享二年の悟りの内容を解明するには本句文と天和三年の句文を比較検討するのが最善の方法のように思われる。

鬼貫が旧作の一部に手を入れて『大坂辰歳旦惣寄』に出したのは、貞享四年の冬「筑後国三池」に赴いていたので、「歳旦句が間に合わ」なかったからではないかと推測されている[10]。そうした現実的理由もあったかもしれないが、五年も前の句文をわざわざ改筆して発表するという行為にはもっと重要な意味が込められていたのではないだろうか。その意味とは何か、それは貞享二年における悟りの内容を公にするということである。新しい俳諧観を公にする場として、新春を寿ぐ『大坂辰歳旦惣寄』はまさに恰好の場であった筈である。以下、天和三年の句文と『大坂辰歳旦惣寄』の句文の比較検討を通して、貞享二年にいかなる悟りがあったのか、その内容を明らかにしてみたい。

両句文を比較してまず気付くのは、構成上の変化である。前者が翁二人の問答形式になっているのに対し、後者は鬼貫が翁二人の問いに答える形になっている。また、前者は二つに分裂していた心（両翁）が一つになって終るのに対し、後者は言い負かされた両翁が鬼貫の腹中に飛び込んで終わる形になっている。このように後者が鬼貫を中心とした構成

になっているのは、鬼貫が新しい俳諧観に対して絶対的な自信をもっていたからであろう。

第二の違いとしては、前者は発句の初五が「芦の屋の」となっているのに対し、後者は発句の初五が「津の国の」となっている点が挙げられる。この異同は、鬼貫が本歌として挙げている古歌の第一句目も初五が「津の国の」となっていることから、鬼貫の単なる記憶違いによるものと考えられる。

第三の違いとしては、前者では古歌の上の句をそのまま借用して我が句とした作意に俳諧性を認め得意然としていたのに対し、後者ではそうした作意に言及していない点が挙げられる。後者で「春」の語を例に挙げ古歌の上の句をそのまま用いても意味さえ違っていれば我が句であると述べているのは強弁以外のなにものでもないが、作意に全く触れようとしていないのは鬼貫の俳諧観に根本的な変化があったことを窺わせるものとして注目される。

第四の違いとしては、後者で新たに『槐安国語』や『五燈会元』に見える禅語の「松に古今の色なし」を掲げ、俳諧も永遠不変の雅の句を詠むことによって豊かで深い内容を表現できるとして「常盤句」を提唱している点が挙げられる。常盤句はおそらく鬼貫の造語で蕉門の不易の句に相当すると思われるが、このような提言はこれまで全く見られなかったもので、これこそが貞享二年における悟りの実体であったと考えられる。悟りの内容は細かく分けると、次の三つに分けられる。

第一はこの時期における鬼貫の俳眼ともいうべき「松に古今の色なし」を最初に掲げ、永遠性、不変性を有する「常盤句」を初めて提唱している点である。鬼貫が「元旦」の次にこの禅語を掲げたのは、永遠に変わらぬ松の緑のように俳諧も不易の句を詠むべきだということを強調したかったからであろう。『大悟物狂』の跋では「常」という語が強調されているが、この語は禅語の「松に古今の色なし」をより簡潔に一字で表したものと考えられる。

第二は「無季の句」すなわち「雑の句」について、初めて言及している点である。山崎喜好氏が本句文について、

鬼貫によると雑こそ本体なのだった。四季とは遂に唯人間の浅知恵で作り上げた約束ごとでしかないと、自己が抱いた在来の迷妄を両翁の言に託しつつ反駁してゐる

と解説されている[11]ように、鬼貫が「ゆたかなる心深し」として雑の句を提唱するのは、四季の根源を「雑」と捉え、永遠不変の内容を表現するには根源的な「雑」の句の方が相応しいと考えたからである。このような「雑」に対する鬼貫の関心はその後ますます強くなっており、『仏の兄』（元禄十二年刊）では独吟の「雑百韻」を載せるまでになっている。

第三は、「一句に四つの季なふして、しかもゆたかなる心深し」と述べて、俳諧に対して初めて「心深し」という言い方をしている点である。鬼貫は『独言』上巻の第五十一段に、

思ふに、いにしへよりの俳諧はみな詞たくみにし、一句のすがたおほくはせちにして、或は色・品をかざるのみにて心浅し。つら〳〵よき歌といふをおもふに、詞に巧みもなく、姿に色・品をもかざらず、只さら〳〵とよみながして、しかも其心深し。

と記している。これは延宝九年以前の俳歴を述べた部分であるが、この

時点では、「心深き」「よき歌」と「心浅き」「いにしへよりの俳諧」とを対比的に捉え、従前の誹諧に物足りなさを感じてはいるものの、俳諧も「よき歌」のように「心深き」句を詠むべきであるとまでは思い至っていない。貞享二年になり、ようやく鬼貫は俳諧も俳諧の独自性を保持しつつ和歌と同じように「心深き」句を詠むべきであることに気付いたのである。

六　さいごに

『独言』上巻第五十一段の「貞享二年の春、まことの外に俳諧なしとおもひもうけし」の箇所について考察してきた結果を、最後にまとめておく。

貞享二年の悟りについては、同年春から翌年の春にかけて鬼貫が俳諧から遠ざかっていることなどを理由に悟りはなかったとする見方もあるが、鬼貫のそれまでの俳諧に対する真摯で求道的な姿勢や『庵桜』の記述などを勘案すると、やはり同年にはある種の悟りがあったと考えるべきである。

悟りの内容は天和三年の句文を改筆して載せた『大坂辰歳旦惣寄』（貞享五年）の句文に示されており、両句文を比較検討することによって明らかにすることができるが、一言で言うと、俳諧も和歌と同様「心深き」句を目指すべきであり、そのためには不変性や永遠性を湛えた常盤句、すなわち雑の句を積極的に詠むべきであるというものであった。

（1）岡田利兵衛氏『鬼貫全集』（角川書店、一九六八年三月）五一一頁
（2）今栄蔵氏「芭蕉俳論の周辺」（『風雅のまこと　芭蕉の本7』角川書店、一九七〇年九月）二一四頁～二一五頁
（3）井口壽氏「鬼貫の『悟り』についての試論」（『橘女子大学研究紀要』第十号、一九八三年七月）
（4）復本一郎氏『本質論としての近世俳論の研究』（風間書房、一九八七年四月）一四六頁
（5）櫻井武次郎氏『伊丹の俳人　上嶋鬼貫』（新典社、一九八三年十月）
（6）岡田利兵衛氏『鬼貫全集』（角川書店、一九六八年三月）四五三頁
（7）山崎喜好氏『鬼貫論』（筑摩書房、一九四四年五月）
（8）山本唯一氏『元禄俳諧の位相』（法蔵館、一九七一年三月）
（9）岡田利兵衛氏『鬼貫全集』（角川書店、一九六八年三月）四九〇頁
（10）櫻井武次郎・安田厚子氏「上嶋鬼貫年譜考」（『地域研究　伊丹』第九号、一九七八年一一月）一七頁
（11）山崎喜好氏『鬼貫論』（筑摩書房、一九四四年五月）一七三頁